

CONTENTS

互いのまなざしが響き合う学習

一人一人の
確かなみとりと支援によって

発刊にあたって「子どもの学びの世界を広げる授業を」……………1
学校提案 「本年度の研究について」……………2・3・4
教科部紹介……………5・6・7
教育研究発表会……………8



子どもが学びの世界を広げる授業を
野の教育者・宮沢賢治の授業実践から

和歌山大学教育学部附属小学校長 松浦善満

私たちは、授業の達人（玄人）といわれた名人教師から学ぶことが多いと思います。例えば、斉藤喜博、東井義雄先生を想う人もあるでしょうが宮沢賢治も達人の一人です。今でも賢治の作品は身近ですが、彼が花巻の農学校で生徒に数学や化学を教えていたこと、またその授業風景が再現されていることを知っている人はそう多くはありません。

直木賞作家で今は亡き畑山博氏は、賢治の教え子からの聴き取りと同僚の残した史料を丹念にひもとき『教師宮沢賢治の仕事』（小学館）に纏めています。また中学校教師だった三上満氏も宮沢賢治研究で名高い業績を上げておられます。ここでは三上氏の『野の教育者・宮沢賢治』（新日本出版社）から賢治の授業の一端を紹介しましょう。

その第一は、野外に出て実際に学ぶ、フィールドワークです。例えば、賢治は「土壌」の授業では生徒を5人ずつのグループに分け、5万分の1地図を持たせ野外実習をよくしました。当時の教え子の一人は、「君たちは矢沢へ行け、君たちは湯本へ行けと言われ、黒い土は腐葉土、赤い土は砂質土などと地図に色分けして記入するように教えられ、五人で相談しながら調べて提出した土性図の結果が試験代わりになりました。したがって零点もなければ百点もありません。先生は野外に出て教えることが好きでした。」と語っています。

第二は、よく考える授業を進めました。これも生徒の証言からですが、ある教え子は、「とにかく賢治の授業は無類に楽しかった…よく考えてみてくださいと、考えることを中心に実習や実験を通して未知のことを発見し、自分のものにしてゆく喜びを味わわせる。体で感じ体からでてきた言葉で考える。そして人間のすばらしさに気づかせる。けっして生徒を呼び捨てにしない。」と語っています。

また、深く考えるためにディスカッションを取り入れ、たとえば「岩手県を工業県として発展させるのがいいのか、農業県として発展させるのがいいのか」、「春を好むグループの理由と秋を好むグループの理由」など討論をさせています。

第三は、豊かなイマジネーション、独創的で楽しい発想、それらを表すユニークな言葉の数々を屈指しました。生物の授業では人体を次のように説明したようです。

「そうです、そうなのです。こうしてじっと息をつめていたって、細胞は、黙っていないんだ。黙っていない細胞が沢山集まって出来ているのが人間なんだ。人間というのはだから、細胞が集まってやっているお祭りなんですね。」

生徒の証言から、賢治が生徒同士の協同の学びを大切にしていたこと、ファンタジックでしかも学びの世界が広がる授業にとりこんでいたことが伺えます。詳しくは別の機会に話しますが、賢治の授業は現在進めている授業改革に十分に生かせるのではないのでしょうか。

★提案★

平成18年度研究主題

「意味と内容」がひろがる学びの創造
「互いのまなざしが響き合う学習」
～一人一人の確かなみとりと支援によって～



志場 俊之

昨年度の反省から

昨年度の実践を振り返ってみると、学習対象に向かう互いの「まなざし」を交流することによって、自分では気づかなかった学習対象への視点を与えられたり、普段は自分が意識しなかったものの見方や考え方を実感できたりして、「まなざしの共鳴」が生まれるという手ごたえを感じ取ることができました。

その一方で、昨年度の研究主題にもある「まなざしの共鳴」による「意味と内容」のひろがりを目指し、より深い考えをもつことや普遍的な概念や真理などを明らかにしようとするなど、「まなざし」の知の部分にこだわりすぎていたようにも感じています。

また、学級経営や友達とのかかわり、学習のスキル、単元構成など、研究主題へ向かうための土台作りへの手立ても十分に行わなければならない必要性を感じました。

これらのことも含め、次のような願いや今年度の方向性を見出しました。

まず、互いが自分の「まなざし」に友達の「まなざし」を重ね合わせて、共に高まっていく学習を目指す学習集団を作っていきたいということです。それは、「いてくれてよかった。」「言ってくれてよかった。」「伝えようとしたことを分かってくれた。」「伝えたことを友達が生かしてくれた。」「どうしてそのように思ったり活動したりしたのかが分かったよ。」という、友達と共に学ぶことによって互いが分かり合えたり、高まり合えたりするような集団です。

また、友達の「まなざし」を認め自分に生かすことで自分の高まりを感じたり、自分の「まなざし」を相手に伝えることにより相手に認めてもらえるという自分の存在感も感じ取らせたいということです。双方向で満足する関係をもつからこそ、互いが関わり合おうとする関係も続いていくと考えるからです。

そこで大事にしなければならないことは、子どもの興味・関心やこだわりを大切にしながら、子どもに寄り添い、どのような「まなざし」をもって学習しようとしているかをみとり、どのように支援していくかという、基本に戻った姿勢で子どもにかかわることです。

なぜなら、互いが学習対象に向かって精一杯追求し、同じ目的に向かって共に力を出し切ろうとしている状況の中で、一人一人の「まなざし」を確かにみとり、支援していくことによってこそ、互いの「まなざし」に対して共感や共生が生まれ、協働する集団が生まれてくると考えるからです。

以上のことから、今年度の研究主題を「互いのまなざしが響き合う学習」としました。

「互いのまなざしを聞き合う・学び合う学習」から「互いのまなざしが響き合う学習」へ

ある学習対象に出会うと、子どもたちは興味・関心をもち、さまざまな角度からその学習対象を見つめようとします。そして、学習対象に自分なりのこだわりをもった「まなざし」をもつこととなります。そこで、学習対象への自分の「まなざし」にも「これでいいのか。」という振り返りから疑問をもち、経験や既習の知識を生かし、何度も学習対象と向かい合い、見つめ直したり付け加えたりしながら学習対象とのつながりを太くし、「互いのまなざしが響き合う」学習へのスタートを切るのです。

「互いのまなざしを聞き合う・学び合う」学習では、自分の興味・関心・こだわりをもって学習対象を捉えた「まなざし」を、「あの子は、学習対象をどのように見ているのか。」というように、互いがどのような「まなざし」をもって捉えているのか興味をもちながら、「まなざし」を聞き合える雰囲気を目指していきます。そのためには、子どもどうしに友達から学ぼうというような謙虚な姿勢が必要です。そういった学習集団の中では、どんなことを話しても聞いてもらえ、自信がないと思うことでも、まずは受け入れてくれるという安心感をもたらします。その安心感が、話してみよう、伝えてみようという意欲を生み出し、活動へとつながっていくのです。

「互いのまなざしを聞き合う・学び合う」学習は、互いが「まなざし」を共有しようとしている段階であり、自分の「まなざし」をひろげることを大切にしている段階です。互いが「まなざし」を伝え合い、聞き合うことで、自分とは違う「まなざし」に気づき、学習対象への「まなざし」がひろがる喜びをもつことができます。また、友達の「まなざし」から学習対象へ

★提案★

向かう姿勢を学ぶこともできます。そして、それは、同じ学習対象に向かう仲間としての連帯感を学習集団の中にもつことにつながります。

「互いのまなざしが響き合う」学習では、学習対象をいろいろな角度から見て、どのように捉え、どのような思いや考えをもったのか「まなざし」を交流していきます。友達の「まなざし」にかかわり、切磋琢磨しながら友達の「まなざし」も取り入れようとしたり、学習対象と対話しながら「まなざし」を深めていったりします。そうして、学びが鎖のようにつながり、スパイラルに高まっていくのです。その過程に「互いのまなざし」に響き合いが生まれると考えています。

子どもたちは、学習対象のどこをどのように見て思考判断し、どのような結論を見出したか、そしてどのようにして相手に伝えようとしているか、互いに交流する中で、友達のものの見方に興味をもったり、思いや考え方に共感したり、活動に触発されたりしながら、それを自分の「まなざし」に生かすことによって、自分の「まなざし」を幅広いものにしていくのです。

友達に向ける「まなざし」も友達の学習対象への「まなざし」というだけでなく、はじめどのような「まなざし」をもっていったその友達がどのような観点に触れ、どのような経緯でそのような「まなざし」をもつようになったのかまで知ることによって友達の「まなざし」のみならず、友達自身をも理解することが「まなざし」を共有することであると考えています。

そういった互いの「まなざし」の擦り合わせが「響き合い」へとつながっていくのです。友達の「まなざし」を自分の「まなざし」に生かすことは、友達自身を理解し自分自身と比べることで自分を大きくしていく営みであると言えます。

「互いのまなざしが響き合う学習」で育みたい力

本校では、学習対象の本質や価値、真理などを「意味」という言葉で位置づけ、子どもたち自身で「意味」の獲得を目指す単元を構成しています。「意味」の獲得を目指しながら、それと同時に、「意味」の獲得の過程を通して、創造的に思考する力や豊かに表現する力などの主体的な能力を育てることを特に大切なことと考えています。それは、知識や技術、教科内容の習得ももちろん大切にしていますが、それよりも、知識や技術、教科内容の習得の過程で培われる知的能力を育成していくことのほうが大切であるという学力観に立っているからです。

「意味」を明らかにしようとすることにより、子どもたちの活動は、学習対象に出合い「まなざし」をもち、互いの「まなざし」を聞き合い、学び合い、響き合うものへと発展していきます。その過程で、自分の「まなざし」が磨かれていき、「意味」に近づいたり、獲得したりしていくのです。互いのまなざしを擦り合わせる聞き合い、学び合い、響き合いの過程において、創造的な思考を働かせたり、的確な判断をしたり、豊かに表現しようとしたりする主体的な能力が養われることとなります。

主体的な能力は、主体的な活動に支えられて発達します。学習対象を見つめたり、友達の「まなざし」を聞いたり、自分の「まなざし」と比べたり、友達に「まなざし」を伝えたりする活動によって発達するのです。学習対象に興味・関心、こだわりを持ちながら、学習対象を明らかにし、「意味」を獲得していくという具体的な目標があるからこそ、それに向かって主体的な活動が展開されるのです。

その中で主体的な能力をつけるためには、一人一人への確かなみとりと支援が必要になってきます。

一人一人への確かなみとりと支援

教師が子どもと向かい合い、共感的に語りかけることに対して、子どもがどのように反応し、どのように返してくるかというかかわりの中で、その子の以前の学習経験や、学習に向かう姿勢、知識、この考えにいたった過程など、その子自身を理解しようとしながら、その子の「まなざし」に目を向けることで真に子どもをみとることができると考えています。みとりは受動的な行為ではなく、積極的に子どもにかかわる行為であり、そうすることでしか真のみとりはできないと考えています。

そのため、子どもの「まなざし」が学習対象とどのようなつながりをもち、子どもの「まなざし」が友達のどのような「まなざし」とどのように擦り合わされるのか、どのように互いが変容していくのか、どのようにすれば学習の組み立ての中でどの子も生き生きと活動できるかということについて、普段の学習や生活から一人一人の子どもをしっかりとみとり、支援のあり方を探っています。

また、その子どもが、集団学習で友達のどのような「まなざし」に揺さぶられ、または揺さぶり、どのような変化を遂げていったかをしっかり記録しながら、次の時間にはどのような「まなざし」をもって集団学習に臨むのかという、子ども理解を繰り返していく地道なみとりによって、真に子どもと子どもどうしのかかわりも理解することができると考えています。だから、みとりを大切にしたいのです。みとりは、単元学習の枠にとどまりません。もちろん、教科学習の枠も超

★提案★

えた、学校生活すべてにおける子ども理解です。また、支援とは、教師の確かな、しかも地道で積極的な子ども自身をみとることに支えられた上で成り立つものと言ってもよいでしょう。それは、確かなみとりに支えられた子どもへの対応だからです。「個人の学びをつなぐ」「集団の学びをつなぐ」支援は、確かなみとりによって可能となります。

互いの「まなざし」を擦り合わせることで生まれる新しい共通な認識をめざし、どの「まなざし」とどの「まなざし」を擦り合わせるか、また、何をつかませたいのか、そして、そのことによって何が生まれるのかを意識し、つなぎながらつむいでいく教師の支援が、「まなざしの響き合い」を生むのです。

また、その姿をみとり、支援を繰り返していく中で、ひろがりや高まりが生まれ、「意味と内容」のひろがりへと向かっていくものと考えています。

学習の評価

目標の一つに「意味」の獲得が挙げられます。そこでは、「意味」を獲得することができたかという一つの評価をすることができます。知識や技術、教科内容の習得は子どもに身に付けさせたい力だからです。

しかし、「互いのまなざしが響き合う学習」で育まれる力」ですすでに述べたように、わたしたちが、子どもへの評価として大切にしたいのは、「意味」を獲得するまでの過程において培われる創造的な思考力や豊かな表現力、的確な判断力といった主体的な能力についてです。「まなざし」を「聞き合う・学び合う」段階から「響き合う」段階にいたるまで、学習がどのように展開されていくのかをみとりながら、合わせて一人一人の主体的な能力がどのように成長していったかをみとり、支援をしていく中で、みとりながら同時に評価をしているのです。

みとりは、すなわち評価であり、支援は、その評価をより高いものに押し上げるための手立てともいえます。

わたしたちは、みとりと支援を大切にしながら、指導と評価の一体化を目指しているのです。

今年も夏季教科別研修会を開きます！

7月27日(木)

午前の部(9:30~12:00)

・社会・理科

午後の部(13:30~16:00)

・生活・体育・複式

7月28日(金)

午前の部(9:30~12:00)

・算数・図工・家庭

午後の部(13:30~16:00)

・国語・音楽

昨年度に引き続き、左記の日程で夏季教科別研修会を開きます。

本校の各教科部の取り組みや考え方を少しでも紹介できればと考えています。たくさんの先生方に来ていただき、ご意見をお聞かせ願えれば幸いです。

なお、夏季教科別研修会での各教科部のテーマや内容については、次号に掲載させていただきます。よろしくお願いいたします。

教科部★紹介

国語科

関連して伝え合い、「初読力」を育む ～ 自己変革を確かめながら ～

私たちは実生活の中で文章を読むとき、初見によって文意や筆者の思いをつかもうとすることが多いです。私たち国語科部では、その力を「初読力」と呼び、初発でのつかみを子どもたちに意識させていきます。そして、そこでつかんだ自分の読みを持ちながら、テーマに沿って「一人読み」をし、自分の考えを友達の考えや文章表現と関連させながら伝え合うことを通して、自己の変革を確かめていきます。初めは読めなかったことが、わかるようになることで、次の学習への「初読力」となると考えています。そんな学習を展開していきます。



碓 起代

須佐 宏

大谷真喜子

志場 俊之

教科部★紹介

全体学習につながるひとり学習の充実をめざして ～ 一人一人のまなざしを大切に ～

社会科

社会科では全体学習につなげるための、ひとり学習の充実を大切にしたいと考えています。社会の問題を自分にかかわりのあるものとして受け止め、追究していくための学習をすすめることが大事だと考えています。全体学習の中で友達の考えを聞き、自分の思いを出し合う中で“まなざしが響き合う学習”を目指しています。そんな願いをもちながら子ども達と楽しく、きびしく学習を深めていきたいと思っています。がんばります！

今日もネタ探しに奮闘中のメンバーです。



片桐 宏

田中 いずみ

山崎 立也

北島 健司
副校長

五感を通して、感じ、表現する生活科学習

生活科 ～ 「ほんまもん」の活動を通して、認識力の土台を育みながら ～

生活科のねらいは、意欲的に取り組む活動や体験を積むことで、「自立への基礎を養う」ことです。そのために、以下に挙げるような子どもに育てたいと考えています。

自分を大切にできる。

友だち（他者）を大切にできる。

自然にはたらきかけ、個別的な事実認識ができる。

社会に生きる自分を意識し、社会への関心をもつ。

さまざまな表現方法に親しみ、自己表現力を発揮できる。

工夫してもの作りができる。



上田 恵

辻 伸幸

算数科

子どもがつなげる算数科学習

～ 思考の「ずれ」を意識して ～

算数科では、思考の「ずれ」を意識しながらつなげるという言葉キーワードに取り組んでいます。友達の式や答え、絵や図を見ながら「よく似ているが言い方や書き方が少し違う。」「説明の絵や図が違う。」「説明の仕方がわかりやすい。」など自分と同じところと違うところに気付いていきます。学習の中では子どもの既存の知識や認識の違いによって子どもたちの思考には「ずれ」が出てきます。一人一人の思いや考えを大切にするとともに、互いの考えを交流し、「ずれ」を意識し合うことで、子どもたちは学習をつなげていくであろう、そして、そのことにより共に学ぶ楽しさを味わうことができるであろう、と考えています。研究会等で交流できればと思います。



(写真左より 岡田明彦・梅本優子・
山中昭岳・宇田智津・市川哲哉)

教科部★紹介

『感動』体験を通して問題を解決する過程を楽しむ子どもを育てる
～ 子どもの自然な学びを響かせて ～

理科

問題解決とは、《未知を知にする》創造的・生産的な思考を意味するものではないかと考えます。私たちは、この過程を通して『花鳥風月を愛でる心』と『科学的な手段と方法』をもつ子どもの姿をえがきます。

そこで次の2点を大切にして学習を進めています。

自然に働きかけ、自分の考えをしっかりとって観察・実験を計画し、結果を分析・考察する個の学びの充実。

他者との思いや考え、分析・考察などの差異や共通点を検討し合い、科学的な見方や考え方を創り出す集団の学びの確立。



不野 和哉

中井 章博

体育科

運動の楽しさを真剣に学ぶ
～ 自分との関わりから ～

今年度、体育科のテーマとサブテーマを上記のように設定しました。それは昨年度と同様に子どもたちに運動の楽しさを真剣に学んでほしいからです。

体育科は運動を学ぶのはもちろんこと、運動との関わりを学習する教科です。この関わりには、自分と運動との関わりや自分と運動を介した友達との関わりがあり、子どもによって違ってきます。このふたつの関わりを大切にしながら、体育科の授業を行っていきたいと考えています。



佐々木和哉

石本 倫章

生活を実感し工夫する楽しさを味わう子どもを育む家庭科学習
～ 学習を生活に生かそうとする子どもの姿をめざして～

家庭科

藤原ゆうこ



今年度の家庭科では、学んで身に付いた力を、日々の生活で実際に生かしていくという“授業 - 生活”間における学びのつながりをより大切にしたいと考えています。学習をすすめていく中で、より真剣な「まなざし」へと変容していく子どもの姿をみとれる家庭科学習をめざします。子どもたちの興味・関心を高められるよう、

授業の中に五感を生かした直接体験や具体的な活動を取り入れる。

根拠のある科学的な見方を大切にしながら、生活への必要性・重要性を感じられるよう学習を展開する。

これら2つをポイントに題材を設定し、子どもたちが楽しみながら生活に生かそうとする家庭科の授業を行っていきたいと思います。

教科部★紹介

音楽科

「見る・聴く・愛する」力を育てる！

《音》を通して、直接子どもたちに働きかけるのが音楽科の特長です。標記の研究テーマを掲げて4年次になります。1・2年次は鑑賞教材の量的拡大から「見る・聴く」力を育てるプロセスを解明しました。3年次は表現する力から「愛する」心を育てるために、《言葉（歌詞）》に着目して曲想の把握から創作にいたる実践検証を行いました。今年度は、《言葉・動き・音》を関連付けて音楽の基礎・基本を育てる方途を探りたいと考えています。《音と言葉》を体験的な《動き》で繋げてみようという試みです。

江田 司



図画工作科

『 “感じる” “表す” 学びの連鎖 』

「あの形いいな」「この色ステキ！」...そんな思いから、図画工作科の活動は始まっています。造形的な表現やまわりの人に関心を持ち、自分の感覚や感性が受け取るものに気づくことはとても大切な第一歩。そこから、自分の表したい感じを思いうかべ、イメージをふくらませ、材料や用具、表現方法を選び、自分のよさを発揮しながら自分らしい表し方をつくり出していきます。そうして、“感じる”ことと“表す”ことを繰り返しながら、学びが連鎖していきます。今年度の図画工作科は、そんな学習を目指していきたいと考えています。

西井恵美子

北山成美



個と個がつながる主体的な複式の学び

～ 認め合うかわりを大切にして ～

複式教育部

「異学年」「少人数」という複式学級の特性を生かします。

そのためにも、少ない人数の中で共に学び生活する一人一人に対して、個人と個人のつながりを重視していきたいと考えています。そして学年と学年、あるいは学級と学級といった、集団と集団のつながりも大事にしたいと考えています。

そこで、何より大切にしたいのは、互いが互いを認め合うかわりです。仲間の発言や行動の良さを認め合い、自分や自分たちの中に生かし合い高まり合う、子どもたち一人一人がそんな目と心をもてるよう努めていきます。

また、本年度からは、これまでの国語・算数における同時間接指導の充実に加え、複式児童全員による縦割りでの学習活動や、理科・社会の学年別指導の研究・実践にも力を入れていきます。



渡本 和孝

坂本 桂

西村 充司

教育研究発表会

第6回 複式授業研究会

個と個がつながる主体的な複式の学び
～認め合うかわりを大切にして～

日時 平成18年 6月 23日 (金) 10時40分 ~ 16時30分
日程 10:20 10:40 11:25 11:40 12:25 13:45 15:15 16:30

受付 研究授業 移動 研究授業 昼食 研究協議会 (全体会・分科会)

研究授業

1・2F<国語> : 西村充司
3・4F<算数> : 坂本 桂
5・6F<理科> : 辻本和孝

研究授業

複式学級全児童に
よる縦割り活動
～表現活動～

全体会：複式提案
研究授業 について
分科会：研究授業 について
国・算・理の3分科会

共同研究開発校

紀ノ川市立 粉河小学校 (松下 裕校長)	田辺市立 咲楽小学校 (玉置 績校長)
橋本市立 西部小学校 (檀山秋洋校長)	田辺市立 二川小学校 (岡山末男校長)
紀美野町立 野上小学校 (藤本禎男校長)	和歌山市立 有功東小学校 (小松龍三校長)
紀美野町立下神野小学校 (津田修吾校長)	和歌山市立 雑賀小学校 (奥野 順校長)
広川町立 広小学校 (福田正幸校長)	和歌山市立 城北小学校 (津田成章校長)
日高川町立川辺西小学校 (芝田博文校長)	和歌山市立 四箇郷北小学校 (辻 民子校長)
勝浦町立 勝浦小学校 (中西 克校長)	和歌山市立 広瀬小学校 (貴志節子校長)
田辺市立田辺第一小学校 (小森一嗣校長)	

研究STAFF

校長 松浦 善満	副校長 北島 健司	教 頭 梅本 優子
1 A 上田 恵	1 B 石本 倫章	1 C 北山 成美
2 A 宇田 智津	2 B 裕 起代	2 C 辻 伸幸
3 A 佐々木和哉	3 B 市川 哲哉	3 C 志場 俊之
4 A 岡田 明彦	4 B 山崎 立也	4 C 大谷真喜子
5 A 須佐 宏	5 B 藤原ゆうこ	5 C 片桐 宏
6 A 田中いずみ	6 B 山中 昭岳	6 C 中井 章博
1・2F 西村 充司	3・4F 坂本 桂	5・6F 辻本 和孝
音楽専科 江田 司	図工専科 西井 恵美子	理科専科 不野 和哉
養護 上柏 薫 (前川 泰子)		
講師 浦 聿 佐原 ちづよ 重黒木 弘子 西村加寿美		
川上 友希 藤田 裕子 福岡千恵子		
Ernie Wakefield Elliott	Michael Stephen Sacks	

From Editors

6年目に突入した「らいぶ・創りえいたー」
「生き生きと本物を創り出すひと」という意味
を込めています。ご意見・ご感想をお寄せ下さ
れば幸いです。

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号
TEL (073) 422-6105
Fax (073) 436-6470
URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>
E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp